

「外国語教育における目的意識」

依岡 隆児（徳島大学 総合科学部）

本稿は外国語教育の目的意識についての、教授法の専門家でもない一教員の実践経験からの考察である。筆者である私が本学のドイツ語入門とドイツ語初級の授業担当なので、本論では大学初修のドイツ語教育を中心に論じていく。

ドイツ語学習の目的についてここでは、「教養」主義の時代ではないが、かといって実用一辺倒というわけにもいかないという立場をとっている。たとえばゲーテ・インスティテュートが「ドイツ語はヨーロッパで重要な公用語である」「仕事をする上でチャンスがふえる」など十項目を挙げている¹。ただこれは、必ずしも日本の大学生を想定したものではない。また多言語教育の必要性を唱える EU の言語政策（「リngua」・「エラスムス」プログラム）なども、日本の大学の現状にはあてはめられない。こうした実用性を強調することはたしかに重要ではあるが、ここでは「実用」か「教養」か、という二者択一ではなく、強いて言えばグローバル時代における第三の意義と方法を探ってゆきたい。²

2010 年度の担当クラスのシラバスでは「授業の目的」として、私は以下のように記した。

「初級文法を習得しながら、簡単なドイツ語を読み、書き、聞き、話すことができるようになること。また、ドイツ語圏の文化や社会についての知識を深めること。」

ややシンプルすぎたかもしれないが、要点は基礎的文法の重視と読む・書く・聞く・話すの「技能」習得のトレーニング、そして比較による文化・社会の理解にある。そのため、目的は具体的・実践的であるべきであり、その実現のためには文化の比較を通じた好奇心の刺激や達成感を与える工夫が必要であると考えた。以下、そのための私の取り組みを具体的に紹介していく。

¹ ゲーテ・インスティテュート (GI) における「ドイツ語を学ぶ 10 の理由」として、「ドイツ語はヨーロッパで重要な公用語」「オリジナルを読むために」「ドイツ人相手のビジネスのために」「旅行業務で有利」「仕事をする上でチャンスが増える」「ドイツ語はヨーロッパ文化の扉を開ける鍵」「学術研究の進歩のために」「ドイツをより集中的に体験するために」「ドイツ語は文化言語」を挙げている。
<http://www.goethe.do/os/kyo/jpswarum.htm>

² 最近の入門者向けのドイツ語学習書では、教養とも実用とも異なる意義を打ち出す傾向がある。たとえば、上田浩一『ドイツ語はじめの一步』（筑摩書房、1995 年）では、ドイツ語を学ぶ意義として、過去の「亡霊」としての「教養」のほかに、「多言語文化のすすめ」とか「情報化の中での英語支配の相対化」という点を強調している。

1.

2010年度は医学部医学科のドイツ語入門・初級と工学部夜間主のドイツ語入門を担当していた。専門としてドイツ語をやる学生が対象ではない。2クラスとも週1コマで通年2単位であったが、工学部は前・後期で若干の学生の出入りがあった。医学部医学科クラスは1年生45名、夜間主クラスは1年生と2年生が半分ずつで、工学部の各学科学生の混成で計20名という構成である。医学部クラスは別の曜日の別の教員のクラスとペアとなっていて、私の方は主として文法を中心に扱うことになっていた。フランス語・中国語との選択必修である。夜間主は通年のドイツ語入門で、学生はこのクラスしか取っていなかった。こちらは一部の学科がドイツ語必修だが、あとは英語との選択必修だった。³

2クラスはこのようにクラス構成もレベルも相当異なっており、したがって一様に論じることができない。しかし、いずれにせよ現状の初修外国語の履修時間数の絶対的な少なさは大きな制約となる。そこで私は両クラスとも「文法」を中心に、授業を展開することとした。その理由は、ネイティブではない日本人教師がドイツ語を教えるという役割意識と、コミュニケーションな学習も文法の基本的習得の土台があって初めて効果的になるという考えからである。ただそのためにはおぼろげな学習ではなく、文法事項は絞り込んだうえで徹底的に反復し習熟していく学習が前提となる。

私自身が学生時代に受けた筑波大学でのドイツ語授業は、ドリル中心で、簡単な問題を反復するというスタイルだった。その場で練習・習得という原則で、教科書は使わず、板書で示された課題を学生が口頭で答えていくものだった。その意味ではまさに「実践」的だったといえる。そのため文法事項の説明は必要最低限に抑えているが、その分、基本を徹底的に反復することが可能となっていた。後日筑波大ドイツ語教室が作成したテキストも、そのような趣旨で、基本文型の習熟のために単文を口頭で言い換えていくことを基本にするやり方となっている。⁴今振り返ってみても、このときの授業が自分のドイツ語学力の基礎になっていると確信できる。私のドイツ語教授のスタイルも、この自分が習ってきたやり方を基本的には踏襲するものとなった。

また最近の英語学習論議においても、小学校からの英語必修化やコミュニケーション重視の反動か、かえって文法の基本の大切さを説く文献が目につく。特にドイツ語のように大学になってから第二外国語としてやる外国語の学習では、基本文法の習得は学術上の必要から教養、さらには実用コミュニケーションといったさまざまなニーズに応える汎用性を有するであろう。

³ ドイツ語検定 Diplom Deutsch in Japan (財団法人ドイツ語学文学振興会)の「検定基準」では、4級が「基礎的なドイツ語を理解し、初歩的な文法規則を使って日常生活に必要な表現や文が運用できる。(ドイツ語授業を約60時間以上受講しているか、これと同じ程度の学習経験のある人)」、3級は「ドイツ語の初級文法全般にわたる知識を前提に、簡単な会話や文章が理解できる。(ドイツ語授業を約120時間以上受講しているか、これと同じ程度の学習経験のある人)」である。したがって、徳島大学でのドイツ語入門はここでの4級レベルを、ドイツ語初級は3級レベルを目標にしているということになる。

⁴ 新保雅浩代表『筑波大学生のためのドイツ語教材‘91』(筑波大学学問プロジェクト研究報告書)、1991年

またこうした文法中心のドリル形式については、2010年度担当の2クラスにおける授業アンケートによると、おおむね理解が得られていた。そればかりか、期末に書かせた授業の感想では、高校までのコミュニカティブな授業のやり方に違和感を覚えているという学生もいた。むしろ文法中心のやり方に不満はなく、負担は大きかったが、その分、身についた、達成感があったとのコメントがいくつもあった。

2.

こうした文法習得を中心に据える場合に、目的意識を持たせるために大切になるのは、実感が持てるように目的をこまめに示すことである。人は意味のわからないことを続けることはできない。そこでたとえば、ドリル問題をやらせるときには、文法事項の定着のためには必要なのだということを、明言してから始めることとした。語学の習得には頭で理解するだけでは不十分で、反復練習しながら体得していくということが重要である。このことは、英語を中学校で習い始めたときに、クラス全員で発音を唱和したり、黒板に書いたスペルをノートに書き写したりということ思い出させるのだろう。この点では工学部夜間生の学生も医学部の学生も、ともに実感が持てたようで、勢力的に取り組んでいた。反復練習の効果をすでに体感してきた学生が多くいるためだろう。

またドリル練習を課するときには、スポーツを練習する要領であるとの解説も加える。大学に入ってまで、唱和・復唱までしなくても、と思っている学生もいるが、意外にもそうした学生にとってもこうしたトレーニングは新鮮であるようだ。語学はこの点で頭でっかちになりがちな大学教育においてよきバランスになりうるかもしれない。

読む・聞く・書く・話すという4技能を身につけるのに、ただ聞いているだけ、文字を目で追いかけるだけでは不十分だ。観ているだけでスポーツができるようになったと錯覚してしまうような「耳学問」であってはならない。スポーツの技能を身につけるのには実際に体にしみこませるように、なんども反復することが必要なのだ。このような説明も、特に部活動をやってきた学生にはわかりやすいようである。

3.

次に、安易な「実用主義」に脱しないことも大切だ。外国語学習の目的は会話ができることだと言われるが、こと日本の大学の初修外国語ではこの点、やや異なる。むしろ外国語学習を通して世界の見方を広げること、つまり世界の理解の仕方にもう一つのチャンネルを設けることも重要な目的となろう。

ゲーテに「外国語を知らない者は、本国語についてなにも知らない」という言葉がある。人はいったんそれを離れて違う言語に触れ、そこから本国語の特性を知るようになるものだ。したがって、外国語を学ばず本国語しか知らない者は、本国語について本当の意味では知っているとはいえないという意味だ。ドイツ語学習の実用性を疑問に思っている学生もいるが、そのような学生にはこのように日本語自体を相対化する効用があると指摘することは効果的である。要

は外国語学習の効用をより普遍的なものとして提示することができるかどうかである。言うまでもないが、相手は大学生であり、その知的レベルを見くびることは禁物である。

たとえば、私はドイツ語の人称の説明のとき、敬称 2 人称 Sie が 3 人称複数形 sie の代用である点を、目の前の人に心理的に距離を置くのに 2 人称ではなく 3 人称を使うためだと説明する。そしてその際、これは日本語も同じだと補足を加える。日本語の敬称「あなた」は「彼方」から来ているが、これも 3 人称の代用という点でドイツ語と同じなのであり、you 一辺倒の英語とは異なるのだ。英語の特殊性も、こうしたドイツ語との比較を通して知ることにもなろう。

同様に、数字の書き方においても、日—独—英という 3 点比較が可能である。数字の 21 は einundzwanzig（「1 と 20」）という。学生たちはこの数の数え方に戸惑う。zwanzigeins（「20 と 1」）と書く学生が必ず出てくる。しかし英語の twentyone（「20 と 1」）という方がおかしいのだ。なぜなら英語でも 14 は fourteen（「4 と 10」）で、20 までは一の位を先に言っているからである。ドイツ語の方が理にかなっている。このような事例は発音の問題や語順の問題にもあるので、その都度新しい文法事項の導入として利用できる。

こうした比較説明は一見すると雑学的に思えるかもしれないが、学生の知的好奇心に訴え、語学学習の意味を納得させる効果がある。なにより面白いと思わせることが、ややともすればモチベーションが下がりがちな語学の授業では大切である。

4.

また目的に対して達成感を持たせることも学習のモチベーションを維持するのに役立つ。私は授業の最後にミニレポートを提出させるが、これにその日にやった文法事項のおさらいとして簡単なドリル問題を課している。添削したうえで次の回の最初にそれを返却する。簡単な問題ということもあって、大抵はよくできている。この種の確認問題は難しくしすぎない方が望ましい。達成感を持たせるために赤で丸を付け、「gut」と書いて返す。残念ながら大学入学前から語学に苦手意識を持っている学生は相当いる。この種の学生にはこのような小さな達成感の積み重ねが、語学への自信につながる。実際、期末に授業の感想を書かせると、英語は苦手だったが、ドイツ語は楽しかったと言う学生は多かった。

また口頭で発表させる場合も、正解でなくとも正解に近い解答にはできるだけ肯定的な評価を与えるようにしている。もちろん精確は期さねばならないことは言わずもがなだが、重箱の隅をほじくるように細かな間違いまで咎めるように矯正するのは逆にモチベーションを損ねる。できているところを評価したうえで、細部のミスを指摘してあげるというスタンスで臨んでいる。「教育」とはドイツ語では Erziehung、英語では education というように、学生の持っているものを「引き出す」ものであることは言うまでもない。この点で私たち教員も、「角を矯めて牛を殺す」にならないように心掛ける必要があろう。

またミニレポート形式は、その日の授業で扱ったポイントを個々の学生に確認させる意味がある。平素から授業の目的を具体的に示すのに効果的である。特に 30 人を超える規模の

クラスでは、学生との個別のやりとりがどうしても少なくなるので、これは大教室でのコミュニケーションのツールとしても有効である。

5.

ドイツ語圏の文化・社会について理解するという目的に関しては、最初の授業で学生に「ドイツ語圏のことで知っていること」を10個箇条書きさせている。ドイツについて知っていることは高校までの学習で相当蓄積されているはずなのだが、それがうまく引き出せない学生が目につく。むしろこれは、自分がせっかく知識を持っていてもそれを引き出せないという状態であることを学生に自覚させることがねらいだ。大学の勉強では自分で課題を見つけ、主体的に考える態度と、その課題のためにどの引き出しを引けがよいかかわかるようになることが大切であると説くようにしている。さらにこれは、最初の授業で緊張をほぐし、柔軟に頭を働かせられるようにするのも役立つ。

また授業の合間に関連するビデオ・DVDを視聴させる。このときのポイントは、できるかぎり「勉強」から離れたものを選ぶことである。その意味では市販の教材用のものはあまり使わない。むしろ映画や、ドキュメンタリーでも、アクチュアルなテーマのものを選ぶようにしている⁵。ビデオ・DVDの効果は映像的に好奇心をかきたてる点にあるからであり、学習のアクセントとして意味があるからだ。またビデオ・DVD教材で会話の練習をさせようとする、フェース・ツー・フェースの緊張感を欠くからでもある。

諺の日独対照も比較表現の説明のときに盛り込んでいる。題材は文化を日本と比較するという観点で選ぶのが効果的だ。

以上、授業の目的について、本学におけるドイツ語の入門・初級クラスにおける実践体験から考察してみた。平素から目的を言明すること、具体的に目的を示してから技能習得を実践させること、比較文化的視点から学生の知的好奇心をかきたてること、目的に対する達成感を持たせること、文化・社会の理解ではビデオなどで学習のアクセントとして補足的に行うこと、といった点を中心にまとめた。教授法の専門的知識も不十分なものではあるが、一教員の日々の実践の中から工夫してきた成果として、ここに参考に供したい。

⁵ 参考、石川栄作、井戸慶治、W. ヘルベルト、依岡隆児『出会いのドイツ語』（郁文堂、1998年）には「ドイツ語圏の映画」リストを載せている。